

若年者に増える子宮頸がん—その理由は検診を受けないから

日本では、毎年 15000 人が子宮頸がんと診断され、約 3500 人の女性が子宮頸がんで死亡しています。現在、20-40 歳代において子宮頸がんの発生、死亡ともに増加しています。死亡した女性のほとんどは検診を受けたことがなかった女性です。検診の重要性も有効性も知らなかったからです。先進国のほとんどでは検診受診率が60~80%と非常に高く、女の子が大人になったら必ず受けるものと多くの人が認識しています。日本だけが20%と例外的に低くなっています。どうしてこの重要な情報が伝わらないのでしょうか。学校でも家庭でも、テレビでも教えてくれないし、話題にもなりません。検診の重要性を伝えなかった国や自治体、学校に責任はないのでしょうか。

現行の子宮頸がん検診は細胞診によって行われていますが、がん自体ではなく、前がん状態（異形成）での検出が可能であり、検診さえ受診していれば、子宮頸がんに至るまでに十分に病変発見可能な時期が存在します。世界で最も普及し、検診の効果が評価されているのが「子宮頸がん検診」です。高度異形成と、次の段階の最も初期のがんの「上皮内がん」が治療の対象になり、子宮頸部の一部のみを切除する子宮頸部円錐切除術（術後妊娠分娩が可能）でほぼ100%の治癒が望めます。

子宮頸がんの原因とワクチンによる子宮頸がんの一次予防

子宮頸がんはその原因から発生までの自然史がほぼ解明され、予防までもが可能になった唯一のがんと言っても過言ではありません。1983年、ドイツのツア・ハウゼン博士が子宮頸がん組織からヒトパピローマウイルス（HPV）16を同定しました。この発見により、子宮頸部細胞のがん化にはハイリスク型（発がん性のある）のHPVが必要条件であることが明らかにされました。そして、この業績に対して2008年ノーベル医学・生理学賞が授与されました。現在では世界中の子宮頸がんの99%がHPV感染が原因であることが証明されています。HPV16型と18型は世界の子宮頸がんの70%にこのタイプが関連しています。このHPV16型と18型に対する予防ワクチンが開発され、本当の意味での予防、すなわち一次予防が可能になりました。今日まで、世界100ヶ国以上で認可され、20カ国以上の先進国で、思春期女子に対するワクチン接種プログラムが無料接種またはそれに近い形で実施されています。成人女性に対しても多めにワクチンを接種する意義があります。ただし、現行の子宮頸がんワクチンは全ての子宮頸がんを予防できるわけではなく、現在行われている子宮頸がん検診はワクチン接種の有無にかかわらず、今後もこれまで通り続けるべきです。

子宮頸がん検診も予防ワクチンも女性全員を対象にしています。すべての女性が罹る可能性があり、だから、これらが重要な予防法なのだとご理解ください。